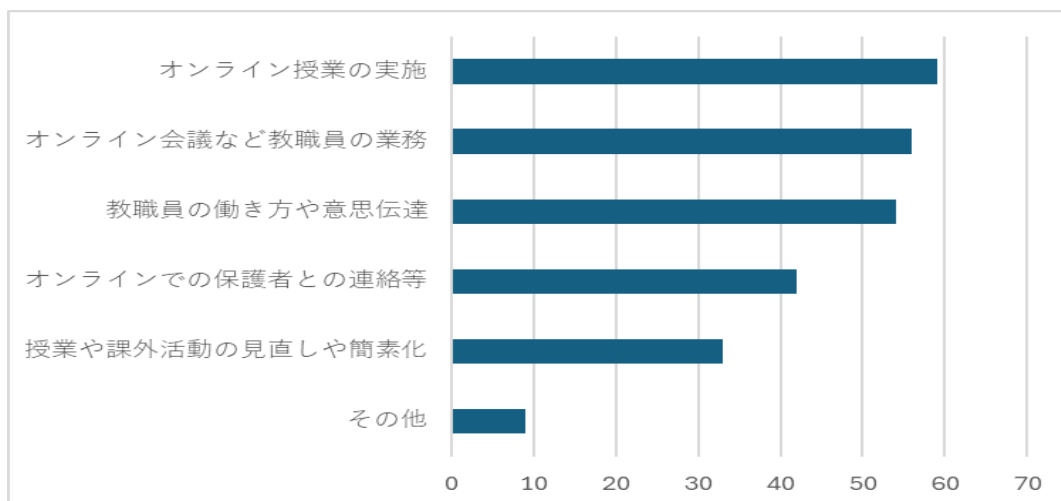


「キリスト教学校教育」2025年3月号

特集「コロナ期をふりかえる」アンケート回答一覧

※学校名、回答者名は不掲載、固有名詞等は一部編集・割愛しています。
※グラフの数字は複数回答によるものです。

1 コロナ期を契機に変化した学校運営のシステムなど



グラフ項目

- ・オンラインによる授業の実施 59
- ・オンラインによる会議など教職員の業務 56
- ・教職員の働き方や意思伝達方法 54
- ・オンラインによる保護者への連絡等 42
- ・在校生の授業や課外活動の見直しや簡素化 32

その他(少数回答)

- ・式典、年間行事の変更。
- ・寮の閉鎖、生活形態が変わった。
- ・オンラインによるレポートの授受 オンライン出願。
- ・ペーパーレス化が進んだ。
- ・(これまで苦手としていた者も含め) 教職員の ICT 活用が一気に広がる。
- ・BYOD (職員個人のデバイスを業務に使用) が進んだ。
- ・コロナとは無関係にオンライン化が進んだ。
- ・特になし。(コロナ前に戻した。)

2 前項に係わる具体的な事例はありますか

小学校

- ・ Microsoft 社の Teams を使用して、教員間、学校と保護者、学校と児童をオンラインで繋ぐシステムを構築した。
- ・ 連絡事項が主になり、教職員間で相談する時間が減少した。
- ・ ロイロノートや Zoom を使った会議や情報伝達を行うようになった。
- ・ 週末のミーティングが Zoom になった。
- ・ 病気で長期欠席する児童のために、一部授業で繋がるできるようになりました。

中高

- ・ 学習支援室で勉強している生徒への授業の配信、オンライン会議の増加。
- ・ BLEND を導入し、出席簿がなくなりました。オンライン授業については、コロナ期を過ぎて対面の授業に戻りました。現在は積極的には取り組んでいません。今後の検討課題です。会議については外部の会議がオンラインのものが増えたように感じます。本校はオンラインではなく、チャペルを利用し、会議は広く換気のしやすい場所で行っていました。
- ・ 元々予定されていたオンライン教育（1人1台端末）の導入と時期が重なり、授業のオンライン化は比較的スムーズな対処ができた。
- ・ お便りの配信、教員連絡事項のオンライン化、教材の配信、課題のオンラインでの提出など。
- ・ 職員会議での報告事項はグループウェアで、生徒や保護者への連絡は Classi の使用が主流となった。クラブ活動に時間制限を設けた。
- ・ 職員会議を効率よく進めようという機運が高まった。オンラインで、議事や資料を共有するようになった。
- ・ Teams を利用した授業、連絡、会議等。
- ・ コロナ禍の在宅期間は、校務支援システムを利用し、聖書のみ言葉を短く配信しました。
- ・ 全寮制である本校は保護者会を1泊2日対面で行なっていたがコロナ禍では Zoom を用いてオンラインで行なった。
- ・ Google Workspace for Education Fundamentals、ウェブでのお知らせを導入。
- ・ 2020 年度 4 月に採用したシステムアドミニストレータを中心に、プラットフォームを G-suite に完全移行。授業以外の業務の DX 化を進めた。
- ・ 小人数教育を逆手に取り、特段の変化なしで運営することに徹しました。

- ・授業を欠席している生徒や学級閉鎖への学習支援対応として、オンライン授業やオンライン HR を実施している。／校外の会議はオンラインで行うこともある。
- ・法人本部との連携会議の一部、外部団体との会議の一部がオンラインのまま継続。

小中高大ほか連携校

- ・特長である全学生、教職員がともに食卓を囲む毎日の昼食のあり方を、対面を避ける形態に変更。機を見て学生委員会とも検討し、早い段階でテーブルを囲む集団食の形を模索し実行した。
- ・ギガスクール構想から、生徒へのタブレットの貸与を開始（1人1台）。生徒が色々な事情で教室にいなくても授業が提供できるようになった。会議も Microsoft の Teams を活用するようになり、対面でもペーパーレスに努める流れにもなった。保護者との面談や PTA 役員の会議もオンラインが増えた。
- ・幼稚園からすべて、独自のアドレスを付与して、オンラインで授業の参加ができるように、保護者会ができるようにした。
幼稚園の運動会も家族(祖父母等)がオンラインで見られるようにした。

大学・短大・専門学校

- ・コロナ期における大学生の窓口対応を、対面からオンライン活用（学内ポータルサイトの QA 機能や Teams、Forms）に変更。＊コロナ期以後の現在も、オンライン活用は継続しており、一部手続きは窓口来訪不要でオンラインのみで完結できるようにもなっている。
- ・Teams、ZOOM、Webex 等のオンラインシステムの利用によるキャンパス間移動を伴う対面会議の減少
- ・在宅勤務制度の導入、Zoom などによるオンライン会議の実施
- ・コロナ禍を機に従前より推進してきたオンラインでの手続き、オンラインでの窓口等を整備、窓口での対面業務を極力減少させ、在宅勤務等新たなワークスタイル等も創出できた。
- ・学生・保護者への連絡にポータルサイトを利用、教職員間の連絡に Slack を導入など。
- ・オンデマンド型オンライン授業、オンライン会議、これまで紙ベースで行っていた各種手続きのオンライン化など。
- ・課外活動に関する各種申請書類のメールでの提出を可とした。
- ・学内の通信環境の増強、教職員間の連絡・オンライン会議などの増加、起案書・稟議書などのオンライン化、学生への情報発信のオンライン化（学内掲示板→GoogleClassroom で

の配信)、学生の課題・アンケート提出方法のオンライン化など。教職員の会議・テレワークに関しては2024年度より対面式に戻された事例も多い。

- ・やむを得ず授業や会議に出席できない場合、Zoomによる参加を認めている。
- ・学内の会議等はteamsを用いて行なっている。
- ・オンライン授業に関する取扱い規程を整備し、現在はその規程に基づき運営している。
- ・双方向型オンライン授業(リアルタイム)・オンデマンドによる授業の実施、オンライン会議の実施、保護者向けオンライン通信システムの導入。
- ・資料のペーパーレス化、等。
- ・海外大学との国際協働オンライン学習プログラムなどの新しい国際交流・教育手法を導入。

[詳しい報告を提供くださった大学もありました]

◆2020年度及び2021年度：

(全学礼拝) Facebookにて毎週火～金曜日オンライン(動画、文書)配信で実施。

春学期56回、秋学期56回

(行事) ほとんどの行事がオンラインによる開催を余儀なくされた。うち、点火祭は無観客ではあったが、聖歌隊、ハンドベル、特別委員会連合の参加により実施し、オンライン配信できたことが恵みであった。

(学生のキリスト教活動について)

ほとんどの団体が活動できない状態。これにより、新入生の各団体への加入および継承が大変厳しい結果となっていることが課題。

◆2022年度

(全学礼拝) 月のうち1週間(火～金)のチャペルでの対面礼拝。その他の週の火～金曜日はHP上で文書による礼拝を行った。春学期56回、秋学期56回。

(行事) 対面で行えた行事もあった。点火祭は本学関係者対象ではあったが聖歌隊、ハンドベル、特別委員会連合の参加により対面開催された。同時にYouTube配信を行ったことで、LIVE配信版は953名の閲覧があり、通常ではキリスト教活動に触れる機会のない方々にもキリスト教に触れてもらう機会となったことは、コロナ禍の中の恵みである。

(学生のキリスト教活動について)

感染拡大の影響はあったものの、ほとんどの団体が活動が再開され、コロナ禍での活動方法を模索しながら活動を行った。

◆2023年度

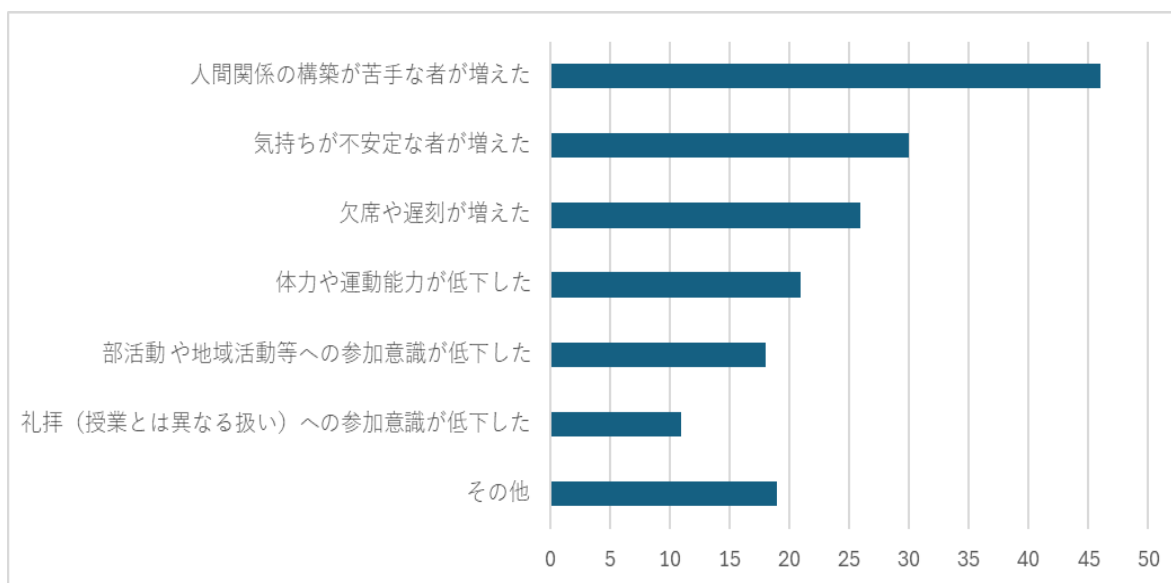
(全学礼拝) 感染症を考慮して、月の内1週間(火～金)のチャペルでの対面礼拝と、その他の週の火～金曜日はHPで文書による礼拝を行った。春学期60回、秋学期60回

(行事) 全学礼拝、春・秋のキリスト教週間、創立記念講演会・音楽会の開催、創立記念式典・チャペルコンサートの開催他

(学生のキリスト教活動について)

ほとんどの団体が活動が再開され、コロナ禍以降の活動方法を模索しながら活動を行った。

3 コロナ後の児童・生徒・学生の心身の変化



グラフ項目

- ・人間関係の構築が苦手な者が増えた 46
- ・気持ちが不安定な者が増えた 30
- ・欠席や遅刻が増えた 26
- ・体力や運動機能が低下した 21
- ・課外活動（部活動や地域活動など）への参加意識が低下した 18
- ・礼拝（授業とは異なる扱い）への参加意識が低下した 11

その他(少数回答)

小中高

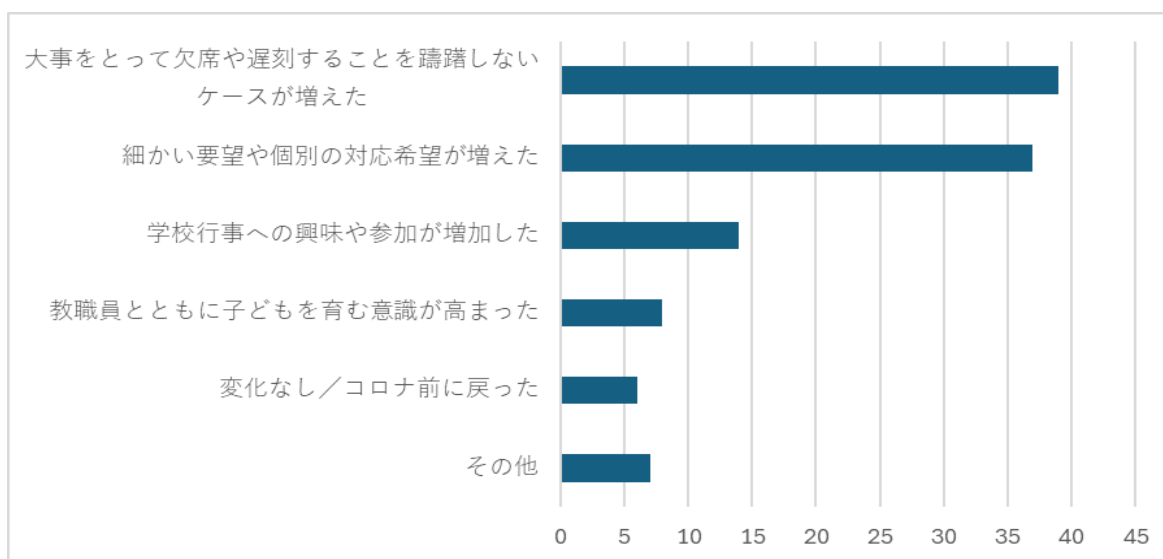
- ・敢えて明るく前向きに過ごそうとしていたように感じる。学校が強要する「制限」をよく受け入れ、忍耐していた。
- ・礼拝での聖歌の歌声が小さくなった。（だいぶ戻りましたが、当初はマスクをしていても飛沫が飛ぶことに抵抗があったようです。）
- ・自粛期間の学年はその後も賛美歌の歌声が小さい傾向がある。
- ・大人しく、無難な行動を取る子どもが増えた。
- ・感覚的ではありますが、何に対しても粘り強さや忍耐が薄らいでいるように感じます。

- ・貸与しているタブレットによる生徒指導的な問題も増えてきた。扱いやルールについて見直しの時期にきている。
- ・もともと不登校生徒は多いですが、「本人感染」「家族感染」以外での欠席・遅刻はあまりありませんでした。
- ・90%以上が不登校経験者で、もともと体調や気持ちが不安定な生徒が多いので、変化として言い切れない。
- ・気力が萎えて登校を控える者が増え、通信制への転出も増えた。

大学・短大・専門学校

- ・礼拝への参加状況はコロナ前とは変わらない状況に戻った。
- ・礼拝、対面での行事への参加数は徐々にコロナ前の水準に戻った。
- ・オンライン授業を経験してきた学生の、対面授業受講、礼拝参加の姿勢に変化を感じる。能動的に授業を聴きに行くといった姿勢が減衰しているように思われる。
- ・コロナ期のオンライン対応は、もともと対面を不得意とする学生にとっては障壁が取り払われ、むしろ他の学生と同じ土俵で参加しやすく、単位も取得できる状況を生み出した。コロナ期以後、対面中心に戻ったことで再び参加しづらくなっている状況も見受けられる。
- ・実際はその通りではなくても、「体調不良」と言えば休んでも怒られない／問題ない、個別対応をしてもらえると考える学生が増えた。
- ・ゼミや課外活動などにおいて先輩からの伝承が途絶えたため、活動が停滞しがちである。
- ・学生の友達作りの悩みが多くなったように聞いています。
- ・コロナ後にメンタル不調を訴える学生が急増したとは言えないが、対面でのコミュニケーションが苦手な学生は一定数存在しており、対面交流の機会が少なくなったことにより、コロナ後も社会参加することを躊躇する学生たちへの支援が必要と考えられる。
- ・変化は感じない。

4 保護者・保証人の考え方や行動



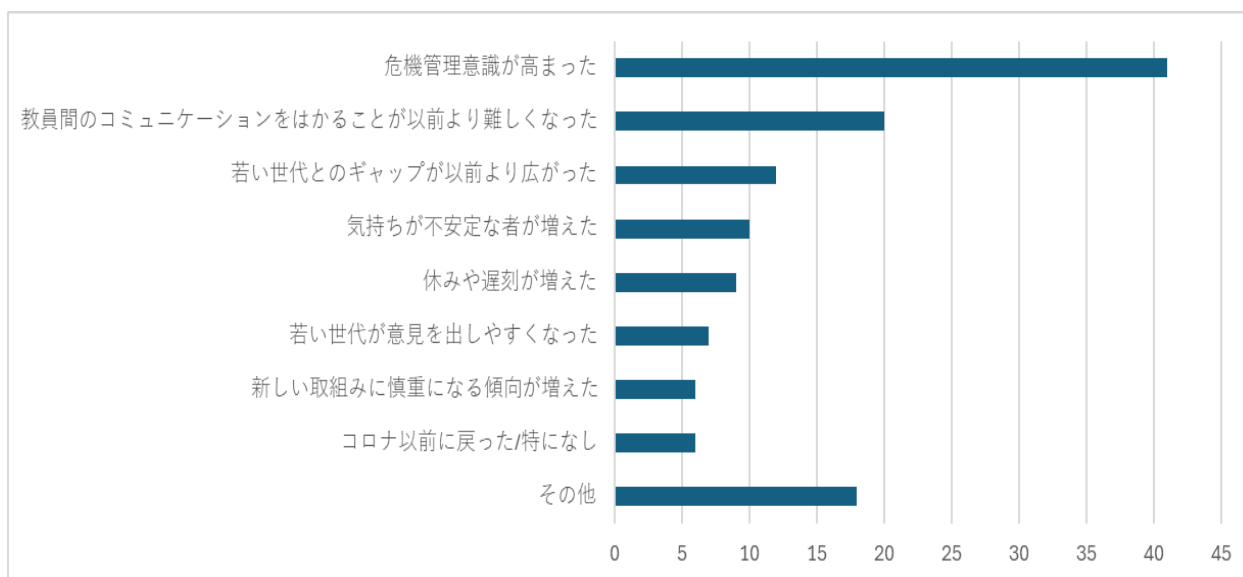
グラフ項目

- ・大事をとって欠席や遅刻することを躊躇しないケースが増えた 39
- ・細かい要望や個別の対応希望が増えた 37
- ・学校行事への興味や参加が増加した 14
- ・教職員とともに子どもを育む意識が高まった 8
- ・変化なし／コロナ以前に戻った 6

その他(少数回答)

- ・子どもが家庭で漏らす学校への不満をダイレクトに苦情として訴える保護者が増えた。
- ・起立性調節障害、適応障害などで不登校生徒もしくは登校渋りの生徒の保護者からオンライン授業を実施して欲しいという要望が増えた。(実施はしていない。)
- ・学校行事への興味、参加という点では、とても関心のある保護者と、そうでない保護者に二極化しているような気がします。特に、コロナ最盛期には急に私立中学受験を決めたという家庭も多いせいか、全て学校にお任せ(良い意味だけでなく)で無関心という保護者もいると思います。また、家庭内の不和が生徒たちに影響を与えたり、児相などの公的機関との連携が必要なケースも増加していると感じます。
- ・不登校の者も行事等は積極的に参加する。
- ・動向変化については把握できていない。

5 教職員の変化について



グラフ項目

- ・危機管理意識が高まった 41
- ・教員間のコミュニケーションをはかることが以前より難しくなった 20
- ・若い世代とのギャップが以前より広がった 12
- ・気持ちが不安定な者が増えた 10
- ・休みや遅刻が増えた 9
- ・若い世代が意見を出しやすくなった 7
- ・新しい取組みに慎重になる傾向が増えた 6
- ・コロナ前に戻った／特になし 6

その他(少数回答)

小中高

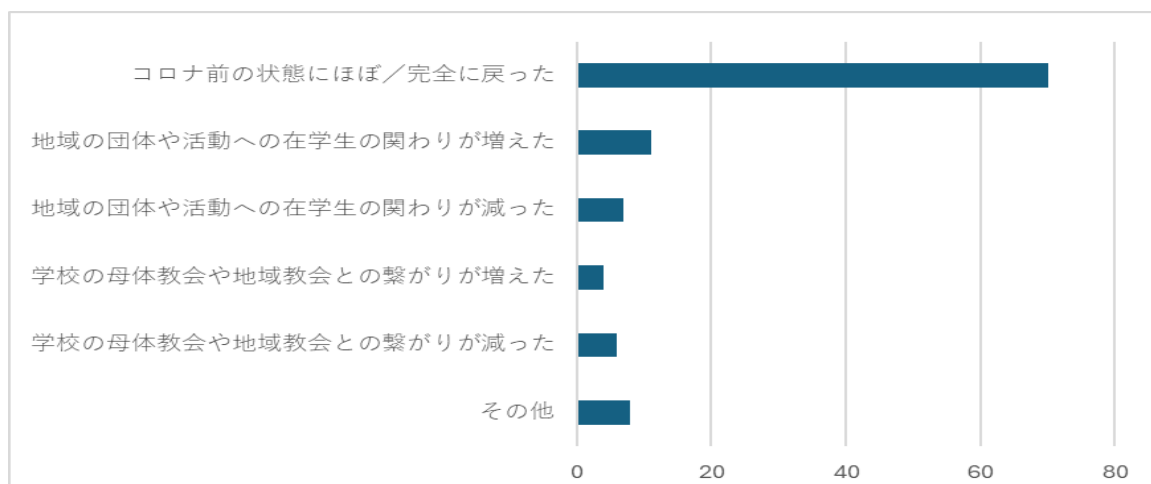
- ・クラスターがおこり休校も体験したが逆にチームワークの良さが明らかになった。
- ・コロナ前にあった伝統の継承が難しく、行事などを体験する中で引き継いでいた不文律や空気感のようなものが失われつつあることに危惧を覚えます。
- ・普段から教員全員で会議で物事を決めてきたが、コロナ禍では管理職や主事が物事を決定することになり、学校全体の体質が人任せになってきてしまった。

- ・教師の対面での教育力が少し落ちたような気がする。生徒指導など管理職が間に入って対応することが増えたかもしれない。
- ・働きには概ね変化はないが、コロナ対応を徹底するという期間を経て、管理職に判断を委ねたいという意識が強まっているように思います。以前は、もっとボトムアップで始まる／動く事柄が多かったと思います。
- ・新しい取組みへの積極性が高まった。
- ・回数は減りましたが、コロナ以降、在宅勤務をする教職員もいます。
- ・退勤時間がコロナ前と比較し、早くなった。
- ・オンラインを利用することへのハードルが低くなったような気がします。
- ・コロナが影響しているのかは不明だが、保護者からオンライン授業の要望が簡単に寄せられる気がする。
- ・社会の激しい変化への対応（オンライン、不登校）に戸惑いを感じ、学校の将来に不安を抱える教員がいる。
- ・会議など、大きめの場所で、長机に一人などの状況はそのままの場合もある。

大学・短大・専門学校

- ・オンライン化が出来る手続きはオンライン化するなど、思い切った変更が出来る様になった。
- ・オンラインを活用するようになった。
- ・多世代にわたり新しい取組への提案が増えた。対面式による歓送迎会など社交の場・雑談を交わす機会が減った影響を感じる場合がある
- ・コロナ禍で実施していた特別措置がコロナ後も継続していると勘違いしている教職員がいる。
- ・特徴的な傾向は把握できていない。

6 対外活動について



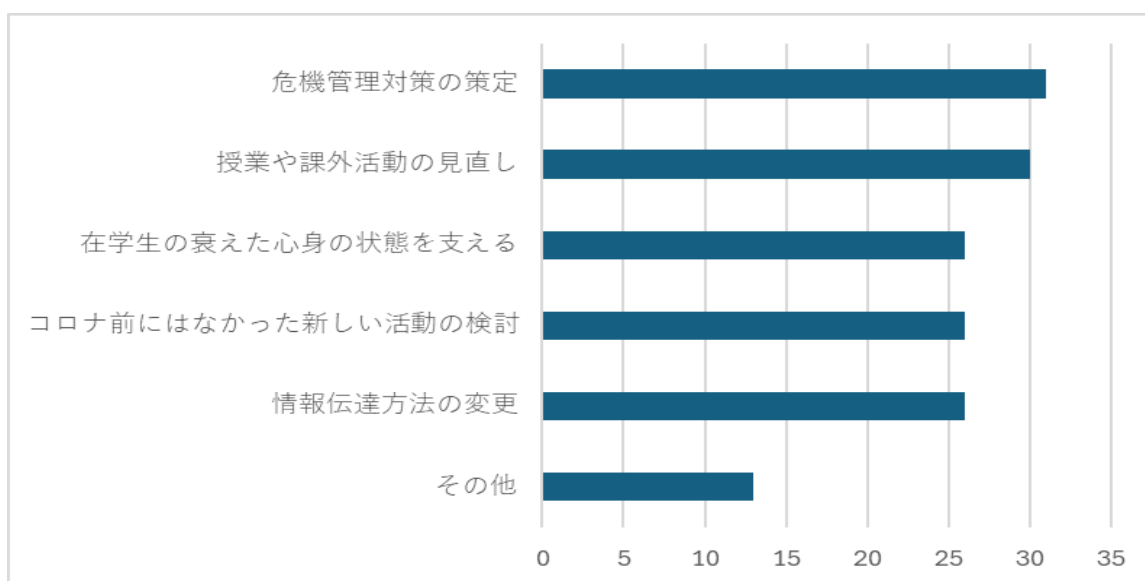
グラフ項目

- ・ コロナ前の状態にほぼ／完全に戻った 70
- ・ 地域の団体や活動への在学生の関わりが増えた 11
- ・ 地域の団体や活動への在学生の関わりが減った 7
- ・ 学校の母体教会や地域教会との繋がりが増えた 4
- ・ 学校の母体教会や地域教会との繋がりが減った 6

その他(少数回答)

- ・ 対面だけでなくオンラインの利用も含めると全体的には増加と言える。
- ・ ほぼ戻ったが、ホールなどで集まる際、生徒間の距離をとる癖が残った。
- ・ 現在コロナ期以前の状態へ戻そうとしている。
- ・ 様々な対外活動を自粛せざるを得ない状況下で、学生の係わりも減ったが、今は戻りつつある。
- ・ 修学旅行は海外から国内へとシフトした。
- ・ 海外情勢が不安定なところもあるので、以前と同じ場所に行くことができない。
- ・ ほぼコロナ前に戻り、海外研修に積極的に参加する者も増えている。一方、学校としては従来の団体での海外研修は円安の影響があり難しい、カナダからオーストラリアに変更したり、アジア地域の短期研修を実施するなど、さらに模索している

7 コロナ期を経て、今後の課題や取組み



グラフ項目

- ・危機管理対策の策定 31
- ・授業や課外活動の見直し 30
- ・在学生の衰えた心身の状態を支える 26
- ・コロナ前にはなかった新しい活動の検討 26
- ・情報伝達方法の変更 26

その他(少数回答)

小中高

- ・コロナ期を通し普段から本校が大切にしている人と人との触れ合いや心的交流、共に食し、共に働き、共に生きることが重要だとの意識が増した気がする。巷では公園などで全く遊べない子供たちがいた時期も、学園内では色々な制限の中で生徒は工夫して距離をとって屋外でライブをしたり、皆での、学園でしかできない、学園内だからこそできる活動を行っていた。生徒の生命力、発想力のすごさにこちらが勇気を得た。土から離れては人間は生きられない。
- ・全日制であるが、登校意識が絶対ではない生徒が増えることへの対応。

- ・「コロナ前にはなかった新しい活動の検討」はコロナが契機かと言われれば、断定できませんが、体験やコミュニケーションを重要視する活動をはじめました。
- ・体験学習的なプログラムをもって展開したい。また自主性と主体性を尊重した生徒自身の取組みをさらに支援したい。学校のDX化の推進は必要である。
- ・地域教会との繋がり回復。
- ・業務の整理と簡素化による働き方改革をさらに進める。
- ・教職員の親密な交わりの促進。

大学・短大・専門学校

- ・このチャンスを生かし、オンライン化と対面式それぞれの長所を生かしたハイブリッド型の改善に継続的に取り組む。
- ・学生活動の再開や活性化の支援、サポート。
- ・コロナ禍の特別措置として礼拝（チャペルアワー）の時間に授業を入れるというイレギュラーが発生したが、結局コロナ後もそのままになっている。礼拝を重んじ、授業を入れないというコロナ前の状況に戻していきたい。
- ・コロナ期を機にペーパーレス化が進んでいる。

自由記述:コロナ期を経験した学校の変化・気づき

小学校

- ・コロナ期を経験することで、それ以前の「当たり前」に行われていたことをより大切に思うことができるようになりました。その「当たり前」を再定義して、一つ一つの意味を確認しつつ、継続することと、変えるべきものを見極めていきたいと思います。
- ・伝統行事の見直しや復活と新しい活動の検討が必然的に行えたのは良かったが、学校生活、学習、子どもや保護者が完全にコロナ禍の影響がなくなったとは、言えないと感じる。
- ・教職員/児童共にオンラインを使いこなせるようになったことはメリットだと思う。今後は心を籠めるべきところと、事務的に迅速に処理すべきところとを見極めていく必要がある。
- ・やはり人との距離を上手に取れなくなっている子どもたちが増えているように感じます。幼少期にコロナ禍を過ごした子どもたちが今からも入学してきますが、十分に対応を検討していく必要を感じています。
- ・保護者に関しては、学校に相談して「待つ」ということができなくなっている方が多くなってきたように思います。
- ・働き方改革とも合わさって、教職員に関しては、子どもたちや保護者の方への対応が丁寧に時間をかけてできていないような気がしています。それがまた次の問題に繋がることが多くなってきているようです。
- ・対面での繋がり、顔（表情）を見ながらの対応、そして児童の成長に関する保護者の考え方の変化が大きく、なかなか難しい場面が増えた。今後それら一つひとつに関しての対応を丁寧に行う必要を強く感じる。

中高

- ・コロナ期は様々な不安の中で、学校も慎重に動かなければならないことが多くストレスの多い期間でもありました。その中で、オンライン授業や iPad の導入による ICT 環境の整備などがかなり進んだようにも感じます。コロナ期を経て、オンラインについては、どの部分を残し、どの部分を継続するのかが課題だと感じています。オンライン対応では、若い人が年配の教員に教えるなど、今までと違った関係性が見られたことが印象的でした。礼拝については学校よりも教会の方が、高齢者が多いこともあり礼拝出席者の減少等、影響が大きい印象です。本校は今年度より礼拝出席レポートを再開しましたが、各教会と連絡を密に取りながら慎重に動いています。教会からは歓迎の声がほとんどでした。

- ・対面教育の大切さ、働き方改革の必要性を感じた。またこのような中でこそ生徒の柔軟な発想が引き出される機会であることを体感した。
 - ・改めて生徒が集団の中で学ぶ教育効果を実感した。生徒自身にもその価値を感じているものが多数いることを実感している。とくに各学校は実体験（クラブ活動や学校行事）を伴う活動への再評価をするべきである。そこにオンラインでは育めない教育の価値が存在している。
 - ・毎日全校生徒が集まって礼拝を守ることのありがたさを痛感しました。
 - ・宿泊行事の見直しなど、生徒が人間関係の構築に資するような行事を増やしていきたい。
 - ・人と人とのコミュニケーションの大切さを改めて実感した。また、こんな不安定な状況の中でこそ、揺るがないものの存在、キリスト教教育の大切さを実感している。
 - ・本校においては、これまで当たり前と思っていたことが根底から覆され、改めて学校での教育について考え直すきっかけとなりました。オンラインによる、礼拝、授業、各ミーティング等も実施いたしましたが、改めて、中等教育段階における、フェイス・トゥ・フェイスによる、対面での授業やリアルな人間関係構築（友人、先輩後輩関係、教員との関係等）、人と人の繋がり大切さを見直すことができました。
- 一方で、状況に応じて、今後もオンラインによる授業やICT等の活用により、様々な事情をかかえた生徒たちの教育保障や活動の幅を広げていくためにも、身に付けたICT等のスキルや学校体制を維持していくことが必要であると感じている。
- ・コロナ期の経験を踏まえて、児童生徒の学びをいかに豊かなものにするか、一斉授業からいかに脱却するか、学校空間を超えた学びを生徒とともにいかに楽しめるか、学びの成果を相互にいかに共有蓄積するか、個別対応と全体への働きかけをいかに両立させるか、教職員の勤務負担をいかに抑制するか、などが問われている。対面・リアルの学校教育が発展できるか衰亡するかの分岐点にいると考えている。
 - ・コロナ前からあったと思うが、このことをきっかけに世代間の意識格差が広がった。
 - ・お酒を伴う会合が減り、職員同士で冠婚葬祭に呼ばない傾向が強まった。
 - ・コロナ期と同時に教員の働き方改革が迫られる時期が訪れたことで、困難を感じる場合があります。生徒たちにとって有意義な活動は、苦勞が多くても継続したいですが、同時に教職員の働きやすさも考えなくてはならないところが大変難しいです。他校の良い取組みがありましたら、教えていただきたいと思います。
 - ・昭和の学校、昭和の教育、昭和の先生は終焉を迎えたことを認め、パラダイムそのものを転換することに躊躇している時間はもうない。

- ・行政の休校要請、人々の恐怖心、ソーシャルディスタンス、マスク、ワクチンなど容赦ない強制力（人々の眼差し）は、緊急事態において優先されるべき姿が明らかになりました。これは、戦中の行政による強制力や人々の視線を想像させるものでもありました。礼拝をしている場合ではない、この事態においては…、行政指導に従わないものは非国民的眼差しにさらされる…このあたりの感覚について、振り返っておく必要があるのかもしれないと思わされたりもしています。
- ・一番大切なのは、やはり信頼し合える関係性であることを改めて認識させられました。目に見えないウイルスは怖いけれど、もっと怖いのは目に見える人間同士（生徒同士、教師と生徒間、保護者と教師、保護者同士など）がコロナによって信頼を損ない、不安になってしまう現象です。その不安に対し、どう学校が安心を提供できるか、そこに尽きる気がします。目に見えない神を信じ、神に生かされているからこそ提供できたキリスト教学校としての安心感が様々な議論の末に与えられたことは感謝でした。
- ・オンラインでできること・できないことが明確になった。全日制学校の本質は「場」であり、そこに集められた者による人格の交わり（エクレシア）であることを再確認できた。
- ・通信制はオンライン授業がスクーリングとして認められていないため、来る回数を減らすような時間割で学校運営をするのは、生徒も教職員も大変でした。
- ・オンライン授業、オンライン〇〇が通常になってきた今、やはり対面授業、直接かかわる中での学びの大切さを教師、学校自体がとらえ直し、考え続ける必要があると考えます。キリスト教学校はただ学力を上げ、上級学校への通過点という立ち位置ではなく、生徒一人ひとりがこれからの人生をしっかりと自分自身として歩むための基礎を育む場所であると考えています。そのためにも、キリスト教学校が大切にしてきたことをこれからも大切にできる体制が維持されることを希望します。
- ・生徒の気質や若年教員の気質の変化がコロナの影響によるものなのか、社会情勢の変化によるものなのかの検証はできていません。ポストコロナ期を迎えて、通信制高校の社会的ニーズの増大や教員の働き方改革の問題が、教育の質や方法に大きな影響を与えていることは事実です。今後、キリスト教学校が単なる存続のためだけの方策を模索するのではなく、私学として、キリスト教学校としてその建学の精神を維持しながら、この世での存在意義を再確認し、教職員間で共有していくことの大切さを痛感しています。
- ・「登校しなくても学校は学習機会を用意すべきだし、用意できるはずだ、なぜならば、コロナ期にそのようにできたのだから」という要望を、簡単に突き付けてくる保護者がいる。対人関係が原因での不登校については、中学校や高等学校の現場に登校して身を置くこと

の中で、どのように人間関係を工夫したらよいのか、学ぶのである。多少のトラブルは当然起きるだろうが、それにどう対処すべきかを考え、身につけることもその現場ならではである。今を逃すと今後、訓練の場は極端に減り、大人になり、コミュニケーション能力が低いままで、社会生活に困難をきたすことになるのではないかと案ずる。

連携校・高等専修・特別学校など

- ・在宅勤務の運用
- ・短期間で考え方や生活様式が変わったので、今後もこのような急な変化があるということ踏まえて、いろいろな対応をしたいと思う。同時にオンラインは便利ではあるが、対面で話をする、活動をすることの大切さも感じた。

大学・短大・専門学校

- ・コロナ期突入時の対応は凄く大変だった。一時期、事務室は学生・教員からの電話問い合わせが殺到するコールセンターと化した。しかし、強制的にオンライン活用を推進することで、それまでの窓口対応時ではなかなか残せなかった対応記録のデータ化などの副産物が生み出され、その蓄積がFAQや手引きの整備などに役立った。また、Teamsでの教員・職員間のコミュニケーション力が上がり、本学で「コロナ効果」と呼んでいる教職員のICT活用スキルの向上が見られ、この経験は今後の教育・業務に活かせるものと感じている。
- ・コロナ期の経験は失ったものも大きい。しかし、闇雲にコロナ以前に戻す必要はないと考える。コロナ期を経験したことにより、私たちの情報伝達方法やコミュニケーション手段が幅広くなったことは確かなことである。この経験と獲得を活かしつつ、しかしコロナ期に失った物事（たとえば、学生たちが積み上げてきたクラブ・部活動の継承がなされなかったこと等）を新たに、根気強く獲得していく必要があると考える。
- ・オンライン授業、オンライン手続き対応、諸活動の見直しなど、コロナがなければ進まなかった改革も複数あったと考えられる。授業外の学生の課外活動への参加率等についてはコロナそのものよりもその後の経済状況の悪化等も絡んで低下をしている現状があると感じられる。
- ・いま振り返ると正に突然 全国的な危機的状況に見舞われた 2019 年度末～2020 年度上半期、公的な情報が少ない、あるいは突然の発令により大学全体・担当者の負担や不安は計り知れなかったが、学生とご家族・大学関係者一同の命・心身の健康を護ること、大学教育とそのため仕事の質を護ることを第一義に、無我夢中で取り組んだ経験であった。

しかし本学の強みや特色を再確認する好機、将来の福祉・保育実践者を育てる養成大学として学生と共に「人と人との繋がりや役割」を再認識する好機、保育・福祉専門職の養成教育に欠かせない知識や考え方を全学的に共有できる好機、これまでの習慣を再度精査する好機として、その後の教育の改善に生きていることが多く認められている。支え合いの意識を持って危機を好機にと全学的に取り組めたことは、担当者の努力・全学的な協力により毎週の礼拝をオンラインにより守り続け、キリスト教主義の学校として、創立以来「命」「愛」「真」「信」などの神様の御教えに触れ、一体感・信頼感に支えられたことが大きな要因となっていると考える。コロナ禍が落ち着いた現在、あらためて「キリスト教主義学校」の御恵みに感謝し、志をもって臨みたいと日々の教育に取り組んでいる。

- ・心身に何らかの病気、障害を持った学生が増えたため、コロナ明けに修学サポートセンターを設置した。本人あるいは家族からの要望があった場合は、オンライン授業を受けられるようにしたり、学生の特性にあった授業など個別にサポートしている。
- ・コロナ禍で導入したオンライン授業システム（Microsoft Teams）を継続して利用しているが、メーカー側でどんどん改善が進んで使いやすくなってきている。一方で大学の授業運営はコロナ以前の体制に戻り、せっかく ICT が進化してもそれを活かした新しい授業運営ができていないのが残念。また、入学してくる学生は高校時代をコロナ禍で過ごした生徒ばかりで、課外活動や地域交流の経験が不足していて人との協働が苦手と思われるので、それを補う形での ICT 活用を考えていくのが望ましいと思う。
- ・対面の授業/会合と同時に、ICTなどのメディア機器利用のありがたさを実感した。
- ・コロナ期の変化や影響に加えて、この間のオンライン授業の手法や SNS、AI 等の技術進展、少子化の影響などが学校運営の諸局面に絡み合っていて表れてきており、コロナ期の影響それ自体をそれとして見極めることが困難であるように感じている。
- ・オンライン授業の取扱いに関する規程を整備し、より多様なニーズに対応しようと心掛けているが、学生は中高生時代の経験を踏まえ、やはり対面授業を志向する傾向が強いと感じる。
- ・学友会活動を始めとする課外活動の停滞状態から未だ脱却できない状態が続いている。短期大学ということもあり、再整備にまだまだ時間を要すると思われる。

.....

※回答にご協力くださった加盟校関係者の皆様に心より御礼申し上げます。(教育同盟事務局)